

平成21年5月22日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520139

研究課題名（和文）メタファーとメタ思考 — 近現代ドイツ文学の場合

研究課題名（英文）Metaphor and meta-thinking in the modern German literature

研究代表者

吉田 徹也（YOSHIDA TETSUYA）

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：80003531

研究成果の概要：本研究は、西欧思想の核心である「メタ思考」と、従来その表現技法として従属的に考えられてきた「メタファー」の関係を理論的に再検討し、後者の前者に対する意義を起源ないし根拠として捉え直すと同時に、その具体的な事例分析を近現代のドイツ語圏テキストを中心におこなった。その結果、「メタファー」は、その表現技法的な側面の背後に、「メタ思考」を誘発し、方向付ける機能をも有し、両者の関係は階層性によってではなく、相互性から捉える必要があるという知見を得た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,200,000	0	1,200,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	390,000	3,590,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：ドイツ文学、思想史、文学論、芸術学、メタファー論、テキスト論、社会学

## 1. 研究開始当初の背景

近代以降、世界的に様々な人々や地域、社会領域を横断するコミュニケーションが盛んになり、従来の伝統や文化の枠組みの再構成を迫るような社会現象や文化活動が見られるようになった。このような社会や文化の変化は、最も先鋭的な形でことばに現れる。自国語と外国語の混交、新たな現象の命名に関する地域的・時代的なせめぎあい等、言語変容は文化変容のパロメーターとも考えられる。このダイナミズムは思想や文学においても例外ではなく、その分析の鍵となるのが

意味変容の機能をもつメタファーではないかと我々は考えた。このような問題意識に支えられて、本研究のスタッフは、平成8年度から11年度にかけては「メタファーの新しい理論的な分析の試みと20世紀ドイツ文学」という科学研究を、また平成13年度から16年度にかけては「メタファー・テキスト・コミュニケーションの理論的統合の試みと近現代ドイツ文学」という科学研究をおこなった。前者の研究では、従来の伝統的な文学・言語研究におけるメタファー研究を理論的・具体的に整理すると同時に、認知理論、情報処理理論、システム理論等の新たな理論

分野の文脈におけるメタファーの機能と意味を検討し、その具体的な表れを、主に 20 世紀のドイツ文学を素材にして検証した。後者の研究では、前者の研究を発展させるべく、メタファーの意味転換（情報の接続・断絶・選択・代替）機能の生産性に着目し、現代ドイツの社会学的コミュニケーション理論を援用しつつ、テキスト・メタファー・コミュニケーションの内在的な関連性を統一的な視点から検討した。また、その視座が実際のテキスト解釈においても有効性をもつことを、近現代ドイツ文学・思想テキストの具体的な分析において明らかにした。このような研究経過で浮かび上がってきたのが、メタファーがテキスト表現上の技術的機能としてのみならず、思想や文学的な創造の原初にある思考のいわば「形式」のようなものなのではないかという問題意識である。今回報告する科学研究は、このような問いに答えようとするものであった。

## 2. 研究の目的

本研究はテキストに現れるメタファー（的運動）を、西洋思想の歴史を（多少の変動は見られるものの）一貫して支え続けた「メタ」という思考の在り方と理論的に関連付けるとともに、その具体的な現れ方を、近現代のドイツ語圏の文学・思想・批評テキストを素材に検討することを目的とした。その際、「メタファー」のもつ二重の機能——一方では「メタ思考」の表現的な側面に寄与する「方法論・技術論」としての性格、他方では、「メタ思考」を誘発・誘導する「原理・起源」としての機能——の解明が、中心課題となった。

「メタ思考」とは、西欧思想・文化の歴史において様々な形で現れてきたが、その根幹を成すのは、思考対象の分離（＝「客体」）と、そこからは不可侵の観察レベル（＝「主体」）の明確な形式的区別である。この分離は、一方では対象世界を抽象化・組織化し、概念的思考を推進するとともに、他方では相対的に安定したメタレベルから対象操作の高度な技術論を獲得することにも寄与した。その現実世界における有効性は、西欧の科学的思考・技術的操作性の世界的な浸透が証明しているだろう。

それに対して「メタファー」は、対象観察を多様化し、従来隠れていた性格を明らかにするという機能的意味から、思考・表現の「技術論・方法論」の一形態であると考えられてきた。メタファー的表現に付随する意外性や発見性は、その上位概念である「メタ思考」の制御のもとで利用され、本質的なものの表現を効果的におこなうためという道具的な性格を与えられてきたわけである。

このような関係性を再検討し、「メタファー」を「メタ思考」の道具的な方法論としてではなく、内在的な原理として捉え返す点が本研究の目的の獨創性でもあり、生産性ともなっている。

## 3. 研究の方法

本研究は、その性格上、テキスト分析を中心とする文献調査・考察が研究方法の中心となった。しかし、コンピュータにおける情報処理、認知心理学等現代における新しいメタファー解析の試みも進行中であり、それらの成果も適宜参照した。

「メタ思考」と「メタファー」というのはあらゆる言語的表現やテキスト生成の場において見られるものであるが、この研究においては、テキスト分析の対象を主に以下のテーマに絞り、段階的に進めていくことで明確な成果が得られるよう工夫した。

第一段階として、これまでの「メタファー」および「メタ思考」の先行研究を検討し、両者の概念上の核心を抽出し整理した。その際、注目するのは、両者の関係性が主題化されているのか、またその場合、どのように扱われているかという点である。

第二段階として、上記の作業をもとにして、「メタファー」と「メタ思考」に関しての理論的な仮説を設定した。その基本的な視点はメタファーをメタ思考の下位概念として規定するのではなく、両者いずれかが根源的であるかをとりあえず決定せず、相互作用に伴う両者の変容の原理ないし相互依存の関係性に着目した。

第三段階として、前段階で設定した仮説に基づいて、具体的なテキストの分析をおこなった。素材としたのは近現代ドイツ圏の文学・思想・批評テキストを中心となったが、加えて関連する芸術学や芸術作品、社会思想や社会学的コミュニケーション論、宗教学や聖典解釈等、できるだけ幅広くとりあげた。この作業は本研究のスタッフが、自らの専門性と関連あるものを分担し、報告・議論する形式をとった。

第四段階として、上記の分析結果から、仮説として立てた理論へのフィードバックをおこなった。具体的にテキストを詳細に検討することで、抽象的な理論段階では予想できなかった発見ないし問題が相当数出てきた。それらを、分析上の過程に起因するものなのか、あるいは理論上の変更を必要とするものなのかについての議論を重ねた。必ずしも全スタッフの意見ないし結論が一致したわけではないが、このような作業の繰り返しにより、本研究で得られた新たな知見や、課題として残された問題等の整理が効果的に進め

られた。

第五段階として、研究全体の総括を試みた。前段階で述べたように、分析素材によっては考え方が分かれたもの、例外的な状況と考えざるを得ないものも少なくなかったが、当初の理論的な仮説の精緻化と、テキストの性格に応じた分析方法の変更など、今後の研究の発展につながるよう生産的な検討と議論が行われた。

以上、研究の方法と経過について、現在の視点から整理してまとめたが、むしろ実際の研究の進行では、必ずしも各段階がそれぞれスムーズに終了し、次の段階へすぐさま移行したというわけではなく、問題が発生するごとにプロセスは前後し、研究は螺旋状の進展であったが、これはテーマの誠実な追求にともなう必然的な結果であったと考えている。

#### 4. 研究成果

##### (1) 理論的な側面での成果

①まず従来の「メタファー」論分析に関しては、ヴァインリッヒ等の古典的なものからリクル等新しい試みまで、メタファーの性格付けと概念の核心を整理した。その結果、表現の差異はあるものの、多くは、意味するもの（シニフィアン）が意味されるもの（シニフィエ）において二重化されるという現象を基底におき、この「ずれ」が一般には本義と転義という階層性を有する形で規定される点に着目している。しかし、概してこのような作用を「発見的」あるいは「意外性」というレトリカルな効果として結論付けており、このような表現自体を観察している思考主体にはメタレベルでの安定的な位置づけが与えられている。

②次いで「メタ思考」の構造上の規定に関しては、伝統的に西欧の思想史においては、それを思考装置として暫定的にみる視点はあるにせよ、観察するもの（主体）と観察されるもの（客体）というフレームが基礎的な前提となっており、そこから観察されるものに対する技術的な方法論としてのメタファーが位置づけられている。つまり、メタファーが観察するもの、思考するものそのものを呼び出しているという発想は、論理的な階層を危うくするものとして、意識的に封じられてきたように考えられる。

③とはいえ、両者の関係性を、同レベルの相互作用としてとらえる考え方も、皆無であったわけではない。かつてニーチェが（言語を客体の名称とする旧来の思考法にとらわれつつも）言語的な思考は本来すべてメタファーである、と規定している。この系譜は、例えば、形而上学の「傍流」であるデリダや社会思想のルーマンに引き継がれ、言語のメタ

ファー的な運動を制御すると見られている主体が、言語（メタファー）による構成物であるという考えを、それぞれの立場から強調した。この考えを推し進めれば、主体や客体というメタ思考のフレームの発生とメタファーという言語の起源は相互依存の関係になる。この考えは我々の仮説と重なるが、それを、より精緻にテキスト解釈のレベルでも実際おこなった例がブルーメンベルクであるとも考えられる。

##### (2) 具体的なテキスト分析の成果

素材としては様々なものが取り上げられたがここでは重要な特徴を有すると考えられる主たるものに絞って要約する。

①ドイツ語圏の近現代文学に関しては、メタファーの本義と転義の意味転換をメタレベルから確定し、物語の進行を制御するトーマス・マンと、両者の関係がしばしば決定不能になり、意味機能が断続的に中座するカフカやムジルのテキストがきわめて対照的であった。これは、メタ思考の優位性を保持しようとする前者と、テキストの生成の場がメタ思考への回収されることを拒む後者の志向性の違いとして理解できる。批評においても、例えばベンヤミンのテキストは、隠された本義を逡巡する転義の受け渡しへの志向性がみられ、これはメタファーの、象徴体系に回収されないアレゴリー的な性格を浮き彫りにしていると考えられる。戦後の実験的な現代文学においては、メタファー的な表現の頻出は指摘できるが、その際、特徴的なのは本義の存在に対する懐疑的なポーズが伴っている点である。これは、西欧文化を貫いてきたメタ思考ないし本来的なる「意味」に対する批判意識が関係していると分析できる。

②社会思想のテキストとしてハーバマスとルーマンの比較分析も行われた。前者は西欧の合理性の可能性を救出しようという「目的」意識の影響から、メタファー的な表現にも本義と転義の階層性を保持し、理性的なコミュニケーションへの寄与を第一義において意味で「メタ思考」志向である。対してルーマンは、すでに彼のシステム理論の中心に「意味の接続」というメタファー的機能をコミュニケーションの原理とし、この動きに自律性を与えている。これはメタファー的表現がメタ思考に従属するものではないことを明確に示すが、同様の傾向はポストモダンの思想家たちにも見られた。

③宗教的なテキストに関しては、主にユダヤ教における聖典とその歴史的な解釈の伝統がテキストを継続的に生産していることに着目し、ハンデルマン等のテキストが検討された。ここで見られたのはメタファーがメタレベルにある聖典を多義的に普遍化していく機能であり、やはり原理的にはメタ思考の

優位性を表すものであったが、このような意図を裏切るようなメタファーによる独自の意味転換の現象の存在も確認できた。

④最後に、芸術学および芸術作品にみられるメタファーの機能について、近年の前衛美術、日本の先端アニメ、地域の芸術活動等の分析もおこなわれた。その結果、極めて多様な現象が確認されたが、大きく分けると二つの方向性に分類できる。すなわちメタレベルでの意味内容をあらかじめ決定し、そのメタファーとしての表現技巧を優先するもの、あるいは表現の創造性を根源におき、その意味内容を逆にメタファーから解釈させるものの二つであるが、概して近現代では後者の方向性を重視する芸術理論およびそれに基づいた作品創造が中心となってきたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 高橋吉文、「新<起承転結>考Ⅰ」、『メディア・コミュニケーション研究』(北海道大学)、55号、査読有、2009、39-118
- ② 西村龍一、「情報の『人形』の形而上学—押井守のゴースト連作について」、『表象』(表象文化論学会)、3号、査読有、2009、225-242
- ③ 鈴木純一、「二つの救済—《パルジファル》と『ファウストゥス博士』」、年刊ワーグナー・フォーラム(日本ワーグナー協会)、2008年号、査読有、2008、102-115
- ④ 吉田徹也、「合意と自律—ハーバマスのロールズ正義論への批判を中心として」、『メディア・コミュニケーション研究』(北海道大学)、53号、査読有、2008、85-98
- ⑤ 吉田徹也、「公共性と国民国家—ハーバマス『事実性と妥当性』における民主主義の理念をめぐる」、『北海道大学大学院国際広報メディア・言語文化部紀要』、51号、査読有、2006、177-185
- ⑥ 堀田真紀子、「芸術による地域文化の活性化」、『北海道大学大学院国際広報メディア・言語文化部紀要』、52号、査読有、2006、27-43
- ⑦ 高橋吉文、「隠喩論Ⅳ—ブルーメンベルク

の基底隠喩配列」、『日本独文学会研究叢書』、37号、査読有、2005、49-70

- ⑧ 山田貞三、「メタフィジック、メタモルフォーゼ、メタファー」、『日本独文学会研究叢書』、37号、査読有、2005、15-26
- ⑨ 鈴木純一、「二次観察としてのメタファー」、『日本独文学会研究叢書』、37号、査読有、2005、27-37

※なお、『メディア・コミュニケーション研究(北海道大学)57号』(2009年11月刊行予定)において、本研究テーマに関して代表者・分担者による論文特集が組まれる予定であり、現在準備中である。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉田 徹也 (YOSHIDA TETSUYA)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授  
研究者番号：80003531

### (2) 研究分担者

高橋 吉文 (TAKAHASHI YOSHIFUMI)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授  
研究者番号：20091473

佐藤 拓夫 (SATOH TAKUO)  
北海道大学・名誉教授  
研究者番号：20091457

石川 克知 (ISHIKAWA KATSUTOMO)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授  
研究者番号：30142665

山田 貞三 (YAMADA TEIZOU)  
北海道大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50128237

鈴木 純一 (SUZUKI JUNICHI)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
研究者番号：30216395

西村 龍一 (NISHIMURA RYUICHI)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
研究者番号：10241390

堀田 真紀子 (HORITA MAKIKO)  
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
研究者番号：90261346

(3)連携研究者

安高 誠吾 (YASUTAKA SEIGO)  
北海道教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20002769

大木 文夫 (OHKI FUMIO)  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：70113660

梅津 真 (UMEZU SHIN)  
北海道情報大学・経営情報学部・教授  
研究者番号：70213494